

正月の「門飾り松」と「祝い箸」の意味

身も心も引き締まるお正月。日本では歳末から新年7日まで、家の門や玄関に松を飾る習慣があります。門松、松飾り、しめ飾りなどいろいろなものを見かけますが、これらにはいったいどういう意味があるのでしょうか。

神道では、その年の守り神(歳神様)が山から下りてきて、1年間にわたり家を守ってくださると考えます。山から降りてくる年神様が、家を探す時の目印が門飾り松なのです。自宅にお招きする時の道しるべと考えてください。

元旦に歳神様が迷わず降臨してくださるよう、門に対(雌松・雄松)の飾り付けをしてお迎えします。門に向かって右に雌松(葉が短くて細い)、左側に雄松を飾ります。

日本の祭壇では右が上位、古来から日本では女性を神・上位に見立てていたのでしょうか。女性のことを「かみさん」「かかあ天下」などとも言いますね・・・

年神様が宿ると思われる松は千年、神を「待つ」、神を「祀る」の意と、常緑であることからマトノキ「真常木」、久しきを「待つ」、「保つ」の意味もあります。

松飾りなどの伝統的なおこないを継承することで、日本古来の考え方を知り、すがすがしい新年を迎えることができれば、それは幸せなことです。



正式に飾るのであれば、お正月には門松を立てるのが理想です。門松は3本の長く太い竹を中心に置いて、松と梅の枝を組み合わせ、下のほうにむしろを巻き、輪飾りをかけたもの。松はいつも緑で、竹はよく育つため縁起がよいとされています。門松が現在のようになつたのは鎌倉時代といえます。江戸時代になり都市部では、「松は千年、竹は万年を契めるめでたいもの年の初めの祝い事」として考えられるようになり、大名屋敷などには巨大な門松が飾られていたようです。

ところが昨今の住宅事情では、なかなか門松を飾れるような環境にありません。そこで2本1組の松を、門や玄関の左右に結びつけ、和紙でできた輪飾りをかけることで簡略化している家が多くなりました。アパートやマンションでは、自室のドアに小さな松飾りを掛けて済ませます。

皆さんの家の周りで「門かぶりの松」の家を見かけると思います。「門かぶりの松」は江戸後期から明治時代に非常に流行った松の仕立て方で、今なお一部の方に人気があります。

門かぶりの松は高価であり、維持にもお金がかかるので、立派な松を仕立てれば「お金もち」のステータスシンボルになると考えられていました。

また、年初、年神様が山から下りてきて、家を探す際の目印が松、神を待つ(松)と考えられていた。

更に松は千年、常緑で縁起が良いとも考えられています。



お正月などのお祝いの席では、必ずといっていいほど使う「祝い箸」ですが、たまに間違った使い方をしてしまう方がいるようです。祝い箸というのは、普通のお箸と形状が異なっているだけではなく、使い方も違うものなのです。

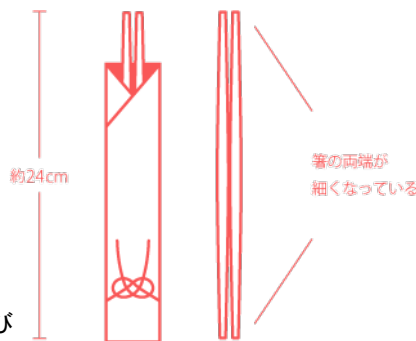
お祝いの席で恥をかかないためにも、せっかくのお祝いの雰囲気壊さないためにも、正しい使い方を学んでおきましょう。

また、祝い箸というのは、先端も持ち手の方も両細りになっている形状をしています、これにもちゃんとした理由があります。

日本人は、通常のお箸を使って大皿料理などを食べるときに、お箸の持ち手側の方を使って料理を取ったりすることがありますが、祝い箸を使うときでも同じように、片方は食べる用、片方は取り箸として使う方がいます。

しかし、これは大きな間違いであって、先端と同じように祝い箸の持ち手側が細くなっているのは、料理を取り分けるためにそうなっているわけではありません。

もう片方(持ち手側)は、神様が使うために細くなっているのです。お正月というのは年神様が来ると言われていて、その年神様と一緒に、おせち料理やお雑煮を食べるために祝い箸を使うのです。神様と共に食事をするので、神様のご加護を受けたり、神様と喜びを分かち合うというのが、祝い箸を使う最大の理由のひとつなのです。



祝い箸は、両方の先端が細くなっていて、「両口箸」とも呼ばれます(柳を材料にし、両端が細くなるように削った丸箸)。

それは、一方は神様用、もう一方を人が使うため、「**神人共食**」を意味しています。

